

昭											年	月	日	才一獨立飛行隊 (師才一六六三一部隊) 三四二一九
19														
同	12	同	12	同	12	11	11	同	11	4	3	略	歴	摘要
日	24	日	14	日	2	9	2	日	1	30	23			
上海(王賓)着 南京出發 南京着 上海(大場鎮)出發 上海(大場鎮)着 南京出發 才五航空軍の指揮下に入らしめらる 南京着 滿支國境山海關通過 支那派遣のため敦化出發 滿州敦化において編成完結 軍令陸甲才三四号により編成下令														

					昭 20	
	5	5	2	同	1	
	15	2	13	日	22	
	平壤において復帰完結	昭20年軍令陸甲才七七号陸重機密才一八八号により復帰着手	子)着・爾後平壤移駐	空中部隊青島(南泉)出発・同日関東州界通過・同日関東州(周水	青島(南泉)着	空中部隊移動のため上海(王賓)出発

1818

年月日	略	略	略	略	摘要
昭和19年10月31日	昭和一九、一〇、一一軍令陸甲第一三六号により浜松において編成完結。				
昭和20年5月5日	不明 熊本にありて沖繩作戦に参加。				
昭和20年5月24日	沖繩北(読谷)及び中(嘉手納)飛行場に夜間強行着陸を敢行し隊長諏訪部忠一外二三名玉砕す。				
昭和20年6月不明	昭二〇、六、一二軍令陸甲第九四号により復帰。				
	隊長 中佐 諏訪部 忠一				

		昭							年 月 日	略 歴	略 歴	摘 要
		20	20	19	19	19	19	19				
		5	3	12	11	11	10	10				
		2	18		7	1	31	11				
隊長 初代 池田春雄 二代 加藤静男		軍令陸甲第一三六号に依り臨時編成下令。 下志津教導飛行師団の人員資材を以て千葉県八街において編成完結。 八街飛行場を基地として100式司偵二型により特攻訓練。 隊長池田少佐の指揮により「サイパン」。「テニヤン」基地攻撃に参加。池田少佐戦死。加藤静男少佐隊長となる。 宮崎県新田原鹿屋に移駐。 加藤隊長殉職。 軍令陸第七七号により鹿屋において復帰、所属人員資材は飛行第二戦隊に転属										

				昭 16	年 月 日	才八三独立飛行隊本部 (司才九一七二部隊) 略 歴
19	3	12	12	7		
	1	7	1	29		
軍令陸甲第三五号により満州海林に於て飛行第八三戦隊本部を基幹として 編成完結 海林出発 仏印着 爾後仏印、泰、馬來、「ビルマ」「スマトラ」島「チモール」島、「ジャ ワ」島、「ニューギニヤ」島等に於て大東亜戦争に従事 昭和一九、二、二三軍令陸甲第二四号により「ラングーン」に於て飛行第 八三戦隊に改編復帰						
						略 歴
						摘 要

至自			至自			昭			年 月 日	略 歴	才二〇六独立飛行隊 (靖第二一三〇二部隊) 略歴
19	1917		17	1716		16					
3	3	3 10	9	7	4	4	4 7	7			
4	2		30	11	22	19	1829	29	28		
<p>臨時編成下令 滿州白城子に於て編成完結 爾後白城子に在りて教育訓練 移駐の為白城子発 牡丹江省八面通着 北支派遣の為八面通発 同日滿支国境通過南苑著 転進の為南苑発・太原著 爾後主として太原に在りて中支及南支の作戦に参加 此の期間の行動の細部不明 転進の為太原発 浜松著</p>											
										摘 要	

										至自			
										20	1919		
											10	4	4
											1710	8	6
復員	仙崎上陸	釜山港出発	復員の為海雲台発	咸興発・同日海雲台著	海雲台発同日咸興著	雁の巣発・同日海雲台著	台北発同日雁の巣著	高雄発台北著	台湾及南西諸島に於ける作戦に参加	台湾高雄著	転進の為浜松発		

		至自		至自至自				昭	年月日	略	略	略	略	略	略
16	15	15	15	14	14	14	13	13							
4	10	11	3	12	9	12	9	8	3	2					
<p>支那において編成完結。</p> <p>中支方面作戦に参加。</p> <p>北支方面作戦に参加。</p> <p>第二次奥地航空進攻作戦（重慶、蘭州の搜索）に参加。</p> <p>主力南支に転進</p> <p>広西方面敵航空基地搜索。</p> <p>主力を以つて中支方面地上作戦に参加、一部を以つて海軍の奥地航空攻撃作戦に協力。</p> <p>仏印「ハノイ」に進駐</p> <p>海軍航空隊の「ビルマ」「ルート」及び昆明等奥地攻撃のための搜索に協力。</p> <p>台湾經由中支漢口に転進</p>															
摘要															

	19	18	17	17	16	16
	10	3	8	3	12	9
	31					
大尉 大尉 大尉 大尉	児 青 荒 荒	玉 木 卷 義	真 秀 義 次	一 夫 次		
<p>重慶地区及び奥地飛行場群の搜索。 南支広東に転進 桂林その他の飛行場群の攻撃作戦に参加。 香港攻撃作戦に参加。 仏印「ハノイ」に転進 昆明等奥地飛行場群の搜索及び仏印作戦に参加。 中支漢口に転進。 漢口を基地として奥地進攻作戦（重慶、衡陽、零陵等攻撃）に参加。 爾後奥地（成都・重慶等）の搜索及び粵漢作戦のため漢口―広東間の航空写真撮影実施 昭和一九、一〇、一一軍令陸甲第一三六号により飛行第八二戦隊に人員資材を転属して復帰。 歴代隊長</p>						

九〇

1826

													昭	
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	19	19	19	19
5	5	5	4	3	2	2	2	1	1	12	11	8	8	8
30	28	19	1	29	24	11	3	20	8	25	10	25	10	10
<p>昭和二〇、五、二、軍令陸甲第七七号に依り現地復帰。</p> <p>「ピナバック」到着警備輸送に従事。</p> <p>「ピナバック」に向い前進</p> <p>第一〇三師団に暇に隸属し協力輸送任務に復す。</p> <p>北部「ルソンナドガン」地区に駐屯、警備。</p> <p>空中勤務者「アバリ」前進</p> <p>空中勤務者「ツゲガラオ」集結。</p> <p>「ツゲガラオ」飛行場に転進</p> <p>台湾転進命令</p> <p>「エサアゲ」飛行場転進。</p> <p>「マニラ」東飛行場に転進。「ネグロス」夜間空輸。</p> <p>「クラーク」飛行場を前進飛行場とす。</p> <p>「セレベス」島「メナド」飛行場に前進</p> <p>「ルソン」島「バンバン」飛行場に転進。第四航空軍直轄。</p>														

	20	20	20	20	20	20
	9	9	8	8	7	6
	2	2	18	1	15	1
收容所に入る。	停戦に伴い戦行動停止爾後生存者は所在の地点に於て武装解除された後米軍	比島「ミンダナオ」島に於て終戦。	「ピナパツ」にて停戦。	「ピナパツ」に転進	北サンボセに前進	北ピナバカンに前進

		至自	至自			昭	年 月 日	独立飛行才二三中隊 (誠才四一部隊)	略 歴	摘 要											
19	19	1919	1919	19	19	19															
12	10	1010	8 2	4	2	1															
28	30	1710	2218		17	20															
同地に在りて要地防空(至二〇、二一)		台中出発、屏東着		同地に在りて要地防空(至一九、二二)		屏東出発、台中着		台湾及南西諸島に於ける防衛戦斗に参加		屏東に在りて要地防空		部隊全滅の記事(①葉参照)あるも他の隊員の履歴にては推定の資料なし		沖繩作戦に参加		太刀洗出発同日台湾屏東着		成完結		昭和一八、一二、二七軍令陸甲第一二一号に依り太刀洗において臨時編	

						至自	
21	21	21	20	20		2020	20
3	2	1	9	8		63	2
5	25	1	2	15		2026	18
田辺港上陸復員						屏東出發、花蓮港着	
基隆港出發						花蓮港に在りて台湾及南西諸島に於ける天号航空作戦に参加	
復員下令						爾後花蓮港に在りて戦力恢復（自二〇〇、八六）	
花蓮港に於て終戦						以降花蓮港に在りて待機	

至自	至自	至自	昭	年 月 日	独立飛行才二四中队 (誠才一六五〇〇部隊)	略 略 歴
2019 19	1919 19	1919	19			
312 12	12 6	6 3	2			
115 15		13 101	29			
<p>昭一八、一二、二七軍令陸甲第一二〇号に依り飛行第五四戦隊の一中队を基幹として広東において編成完結 第九飛行師団に隷属 一、編成地不明 二、当時五四戦隊は広東に在りて防空任務、往田准尉の履歴参照 「スマトラ」島「パレンバン」に在りて防空任務に従事 「スマトラ」島「マナ」に転進 「マナ」に於て反攻濠東作戦に参加 「反攻濠東作戦」は世良少尉の履歴に依り記入反攻濠東作戦の字句の可否 「スマトラ」島「タンジュンバト」に転進 「タンジュンバト」に於て前記作戦に参加</p>						
摘要						

										至自		
										20	2020	20
2	2	2	1	8	7	7	7	5	7	3	3	
22	19	15	1	15	17	16	2	30	1	2	2	
<p>「スマトラ」島「ベトン」著</p> <p>「ベトン」に在りて前記作戦に参加</p> <p>昭二〇、五、二軍令陸甲第七七号に依り復帰</p> <p>「ベトン」発</p> <p>台北著</p> <p>台北発・宜蘭著</p> <p>爾後宜蘭に在りて停戦</p> <p>復員下令</p> <p>内地帰還の為宜蘭発</p> <p>基隆港発</p> <p>鹿見島港上陸・復員</p>												

昭 19	昭 19	昭 19	昭 19	昭 19	昭 19	昭 19	昭 19	昭 19	昭 19	年 月 日	略 歴	摘要
20	20	20	19	19	19	19	19	19	19	6 6 20	<p>独立飛行第三一中隊 略歴</p> <p>(威第一八九〇二部隊)</p>	
3	2	1	11	9	11	8	6	23	20		<p>昭和一九、六、一、軍令陸甲第六一号に依り飛行第五八戦隊の一重爆中隊の人員を基幹として水戸陸軍航空通信学校に於て編成完結。</p> <p>隊長以下約五〇名空中輸送にて南方転進、地上部隊白石中尉以下一〇九名船舶輸送で転進。</p> <p>地上部隊昭南上陸</p> <p>中部呂宋「マニラ」上陸。</p> <p>空中部隊「バンバン」到着</p> <p>部隊全部集結。</p> <p>空中部隊台湾転進地上部隊北部呂宋転進。</p> <p>地上部隊主力「ツゲガラオ」到着(白石中尉以下百名)</p> <p>第三六航空地区司令官の指揮下に入る。</p>	

	20	20	20	自 20	20	20	20	20
	9	9	7	6 6	6	6	5	5
	2	2	16	1715	10	1	30	1
	<p>臨時歩兵第二二大隊第三中隊に編入（一部指揮班白石中尉以下九三名第二小隊を編成）</p> <p>昭和二〇、五、二、軍令陸甲第二七号に依り現地復帰）</p> <p>勤兵団長の指揮下に入る。</p> <p>「ホームスクール」陣地確保に成功す。</p> <p>漸次隊として最大の激戦を為す</p> <p>部隊は人員の損耗甚だしく遂に編成解除の止むなきに至り、警戦第三大隊長の指揮下に入り門口隊を新に編成す</p> <p>比島「ルソン」島に於て終戦。</p> <p>停戦に伴い戦斗行動停止爾後生存者は所在の地点に於て武装解除された後米軍収容所に入る。</p>							

至自		至自	昭	年 月 日	独立飛行才四一中隊 (誠才一六六八三部隊)
2019	19	19	19		
311	11	118	8		
2430	30	2620	20	略 歴	略 歴
爾後上海に在りて対潜警戒	転進の為周水子発、同日満支国境通過上海著	満州周水子に在りて主として対潜警戒に従事	昭一九、七、二五軍令陸甲第九三号に依り臨時編成 第二航空軍隷属		
上海著後(定す)	上海著日次は不洋なるも周水子一上海約八〇〇軒として同日上海著と推定す	新保大尉の履歴に依り周水子に在りて対潜終戦と記入す		摘要	

21	21	20	20	20
2	2	9	8	3
27	22	2	15	25
鹿兒島港上陸・復員	基隆港出發	台湾宜蘭に於て終戦	停戦宜蘭に在りて待機	上海発・同日台北著 爾後台湾（台北・台南・宜蘭等）に在りて南西諸島の作戦に参加
				自一九〇九、三、二一（一） の任務行動不明なるも多分東支那海の対潜警戒として 推定記入 南西諸島の作戦に参加し推定記入

昭 19	年	独立飛行第四二中隊 (誠第一九一〇四部隊)
19	略	
10	略	
19	10	昭和一九、一〇、一一、軍令陸甲第一三六号に依り北方軍直協飛行隊の称号を 変更し編制改で着手。 台湾潮州において編成完結
20	10	
19	10	第八飛行師団長の隷下を脱し第五航空軍司令官の隷下に入る。 転進のため潮州出発、同日南支汕頭空港着
20	10	
20	10	汕頭空港出発、広東空港着
20	10	
20	10	第八飛行師団長の指揮下に入る
20	10	
20	10	台湾転進のため広東空港出発、汕頭空港着
20	10	
20	10	汕頭出発、台北空港着
20	10	
20	10	台湾並びに南西諸島における天号航空作戦参加 作戦準備
20	10	
20	10	摘要

				昭 20
			21	21
			2	2
			27	22
			15	15
			鹿兒島上陸、同日復員	停戦に伴い戦行動停止爾後部隊に武装解除された後米軍収容所に入る
			基隆港出發	
				内地帰還のため大排沙出發

至自	昭										年	独立飛行第四三中隊 (誠第一九一〇八部隊) 略歴
1919	19	19	19	19	19	19	17	17	17	17	月	
9 8	9	9	8	8	8	2	8	8	8	8	日	
2530	26	25	30	25	24	27	17	14	10	7	略	略
<p>中千島得撫島中部軍直協飛行隊において戦務乙に従事。</p> <p>八戸市着。</p> <p>移駐のため得撫島出発。</p> <p>計根別出発、千島得撫島着。</p> <p>北海道計根別着。</p> <p>八戸市出発。</p> <p>八日市出発、同日八戸市着。</p> <p>八日市着</p> <p>移駐のため帯広出発。</p> <p>中部軍直協飛行隊帯広において編成完結</p> <p>軍令陸甲第三一号により臨時編成下令</p>											歴	
											摘要	

21	21	21	21	20	至自 2020	20	20	20	19	至自 1919	19	19	
2	2	2	2	8	5 3	5	3	1	10	1010	10	10	
22	21	20	14	15	1426	27	27	17	30	1710	8	1	
復員	鹿児島上陸	基隆港出発。	内地帰還のため台湾宜蘭郡員山庄内湖出発。	停戦に伴い戦闘行動停止爾後部隊は武装解除された後米軍収容所に入る	昭和二〇年第一期航空作戦参加。	宜蘭に移駐。	宝安出発、同日樹林口飛行場着、沖縄天号航空作戦参加。	恒春出発、同日南支宝安着。	中部軍直協飛行隊の称号を変更と編制改正	昭和一九、一〇、一一、軍令陸甲第一三六号、及び陸軍機密第五九四号により	台湾竝びに南西諸島における防衛戦斗に参加	台湾恒春着	移駐のため八戸市出発。

				至自		至自		昭	年 月 日	独立飛行才四四中隊 (冀(台)才一八九七〇部隊) 略歴
				19	19	1918	1817	17		
7	7	7	6	4	3	4 9	9 12	12		
20	18	10	10	8		8 1	1 1	1		
比島「ニコラス」着				芦屋出發同日朝鮮群山着				空中移動		地上移動
葡池出發台湾屏東經由				以後、航空軍司令官の隷下にあつて主として対潜警戒に任ず				柏の東部軍直協飛行隊に於て西部軍直協飛行隊の編成完結		
群山出發同日葡地着				地上整備員の主力門司港出發				福岡県芦屋飛行場に駐屯		
派兵下令同日独立飛行第四四中隊と改称				同月朝鮮群山着				熊本県葡地飛行場に駐屯		
摘要										

19									
10	9	8		7	7	7	7	7	7
15	30	31		12	13	11	10	9	
<p>爾後第一二飛行師団長の隷下にあつて主として哨戒および輸送船団の護衛に任ず</p> <p>「アバリー」に移駐</p> <p>「マリキナ」に移駐</p> <p>中隊長以下空中勤務者の主力と地 中島武夫准尉を長とする地上整備員</p> <p>上整備員の一部(約三〇名)マリ の主力および空中勤務者(特操)の</p> <p>キナ出発同日北「ボルネオ」「ラ 一部(約八〇名)はマリキナ残留</p> <p>ブアン」着</p> <p>爾後独立第一〇飛行団長の隷下に</p> <p>あつて主として哨戒および輸送船</p>									
<p>群山出発</p> <p>釜山着</p> <p>釜山出発同日下関着</p> <p>下関出発</p> <p>比島「マニラ」上陸</p>									

	20		19				20	
	1	12	9	9	6	5	3	
	15	20	17	20	23	30	13	
	歴代隊長 初代少佐 二代大尉	察戦斗参加 「ルソン」島「マリキナ」山系防	東「マリキナ」第一四九飛行場大隊に転属	東「マリキナ」第一四九飛行場 て武装解除	比島「マリキナ」残置隊爾後の行動 「マニラ」市郊外「テレサニ」に於	「ケンゴ」にて武装解除	飛行第八三戦隊に編入 現地復帰	「ケンゴ」に移駐 団の護衛に任ず
江口一男	塚田清							

至自		至自		昭		年月日	略歴										
20	20	20	19	19	19			17	独立飛行第四五中隊 (翼第一八九七一部隊)								
3	2	1	12	12	10	5											
			8	20	16	10	31	30	20	11	20	略					
戦力回復のため昭南に後退、残存空中勤務者は特攻要員として内地帰還。 在比島部隊は米軍「セブ」島上陸に伴い全機損害をうけ部隊人員は山嶽地帯に		「レイテ」作戦参加。		軍令陸甲第一三六号により独立飛行第四五中隊と称号変更。		主力「ボルネオ」に転進。		比島付近の船団掩護。		比島「セブ」島着。		台湾屏東着。		比島移駐のため釜山乗船。		京城において朝鮮軍直協飛行隊編成。	
						略		歴		略		歴		摘要			

	20	20	20	20	20
	12	12	10	9	8
	18	10		1	15
	浦賀上陸、復員。	「レイテ」島出発。	「レイテ」島収容所に移動。	「セブ」島米軍収容所に収容さる。	停戦。 入り地上防衛戦に参加しつゝ自活態勢に入る。
	新隊長 陸軍少佐 永日輝雄				

昭	自		至		年	月	日
	19	19	20	20			
19	10	10	6	4			
11	20	20		2			
<p>独立飛行第四六中隊 (誠第一九一〇七部隊)</p> <p>略 歴</p> <p>昭和十九年十月十日、東京出発同日台湾着。更し編成改正下令。 軍令陸甲第一三六号により東部軍直協飛行隊の称号を独立飛行第四六中隊と変更し編成改正下令。 台湾において編成完結第八飛行師団長の隷下に入り沖繩作戦を準備す。 特攻隊として全員沖繩作戦に参加。 右作戦間部隊は大損害をうけ部隊総員一六〇名中戦死一三〇名生死不明七名。 台湾において終戦。 生存者は台湾基隆より復員。</p>							
<p>略 歴</p>							
<p>摘要</p>							

年 月 日	略 歴	摘 要
昭 19	至自	
8 10		
1420		
	<p>昭和一九、一〇、一一軍令陸甲第一三六号により第六直協飛行隊の称号を 変更し台湾台東に於て編成改正 第八飛行師団隷属 台湾（主として台東）に在りて台湾及南西諸島に於ける作戦に参加</p>	
		<p>一、大藤、正樹大尉及河野正生軍曹の履歴には本期間内の記事全然なし 二、台湾の南西諸島に於ける作戦に参加は、吉野個人の推察なり</p>

独立飛行才四七中隊

略歴

(誠才九九一〇部隊)

	21	21	20	20
	3	2	9	8
	5	28	2	15
<p>備考</p> <p>本部隊の前身は、第六直協飛行隊として満州に駐屯し（昭、一九、二迄）爾後一旦内地に帰還、対潜訓練、昭一九、六、一〇第八飛行師団の隷下に入り台湾に転進、昭一九、一〇、三〇台東に於て編成改正す</p>	<p>田辺港上陸、復員</p> <p>基隆港出発</p> <p>復員下令</p> <p>台湾台東に於て終戦</p> <p>台東において停戦待機</p>			

		至自	至自							昭	年 月 日	独立飛行才四九中隊 (誠才九九一二部隊)	
	18	1717	1717							16			略 歴 略 歴
1	1	95	54				11		7	7			
24	13	3017	729		25	23	17	14		29	16	摘要	
南苑出發	南苑出發	浙贛作戰に参加	南苑に在りて冀南作戰に参加	爾後南苑駐屯									

19		18						18	1818	至白
2	11	11			10	10	10	10	2 2	
14	5	3	29	22	21		12	11	10	2715
<p>第三飛行師団長の隷下を脱し第一航空軍の隷下に入る</p> <p>同日三灶島上陸</p> <p>九籠港出発</p> <p>九籠港着</p> <p>上海港出発</p> <p>上海着</p> <p>爾後三灶島着</p> <p>嘉義出発同日三灶島着</p> <p>同日台湾嘉義飛行場着</p> <p>上海大場鎮飛行場出発</p> <p>同日上海着</p> <p>転進のため先発として南京出発</p> <p>爾後南京に駐屯</p> <p>蘇淮作戦参加</p> <p>転進のため南京出発</p>										

4	4	3	3	3	3	3	3		2	2			
12	1	31	30	27	9	2	1	29	28	27	26		
浜松出発・新田原着						機種変更	岐阜出発・浜松着	那覇出発・岐阜着	台北出発・那覇着	嘉義出発・台北着	嘉義着	島出発	部隊移駐と機種変更のため三灶
	台北着	高雄出発	高雄上陸	九籠港出発	同日九籠港着	移駐のため三灶島出発							

至自						至自				
21	20	20	2020	19	1919	19				
2	2	9	8	6	3	10	10	1010	6	4
27	22	2	14	2026	30	28	1412	28	15	
<p>新田原出発・台北着</p> <p>第一航空軍の隷下を脱し第八飛行師団の隷下に入る</p> <p>台湾並びに南西諸島に於る海上交通掩護及防衛戦斗に参加</p> <p>昭一九、一〇、二〇軍令陸甲第一三六号により第八直協飛行隊の称号を 変更し編成改正着手</p> <p>台北に於て独立飛行第四九中隊と改称編成完結</p> <p>台湾及び南西諸島における天号航空作戦に参加</p> <p>停戦詔書発布</p> <p>台北に於て終戦</p> <p>内地帰還のため基隆出発</p> <p>鹿兒島港上陸・復員</p> <p>備考</p> <p>本部隊は昭一九、一〇独立飛行第四九中隊（誠第九九一二部隊）として 改編せらるるまでは第八直協飛行隊（誠第一七二部隊）として作戦任務 に服したるものとす</p>										

				至自	
				2019	19
20			20		
9	6	5	3	110	9
2	14	20	10	1020	1
<p>爾後同地において作戦参加</p> <p>「マモラー」「カロカン」飛行場に移動</p> <p>第一次捷号作戦参加</p> <p>中隊長の指揮する主力は北部「ルソン」「エチャゲ」飛行場に逐次集結</p> <p>航空作戦続行、大柳大尉の指揮する一部（約九〇名）は振式集団に編入</p> <p>「マニラ」東方地区防衛作戦参加</p> <p>「エチャゲ」に於て臨時集成飛行隊を編成す</p> <p>在比島航空部隊整母要綱に基づいて第六飛行団司令部、飛行第三〇戦隊</p> <p>基地航空部隊より残置人員の配属を受く</p> <p>「エチャゲ」飛行場米軍の進入する所となり残存せる一機を台湾に向け</p> <p>飛行せしめ主力は飛行場を撤退南下「ヌイハビスカヤ」州「ピナバガン</p> <p>附近」に占拠遊撃戦を展開</p> <p>終戦に伴い、戦斗行動停止</p> <p>爾後生存者は所在地点において武装解除を受け米軍収容所に入る</p>					

	20	20 至自	20 至自	19 至自	19	19	至自 1917	17	17	昭 17 至自				
	2	5 4	2 1	8 5	5	3	4 9	7	7	7 6				
	10	3120	201	1027	下旬	20	1010	24	19	1025				
	せしむ。	城大尉の指揮する一部（七機）を以て浙江省杭州に展開せしめ特攻訓練に邁進	力	全力を以て宝慶、零陵、衡陽に展開し第二十軍の二〇号作戦（芷江攻略）に協	戦第二期（桂林柳州攻略）に主力を以て衡陽零陵に展開し協力す。	來陽に展開第二〇軍南部與漢打通作戦に中隊全力を以て協力。	第十一軍の湘桂作戦に協力し一部を以て依然第一一軍に協力せり。更に湘桂作	編制改正着手同月二一日完了	主力を以て中支漢口に転進	演習に協力すると共に駐蒙軍に協力し、蒙古に於ける対「ソ」作戦準備に任ず。	部隊は太原駐留間北支方面軍司令官の隷指揮下の各種地上作戦空地上作戦連合	地上部隊は中華民國河北省南苑に集結	空中部隊は中華民國河北省南苑に集結	温春・牡丹江に於て通信實設演習に参加

								昭
21	21	20	20		20	20	20	20
4	3	10	8		8	6	6	3
1	27	8	15		13	19	上旬	14
三月四日博多上陸同日復員	内地陸復員、(学徒復学者武田直文中尉以下百三名は二月二十八日上海出発)	上海に集結。	終戦により主力は杭州嘉興縣池湾に移転を命ぜられ該地に駐留。	停戦により中隊長は命に依り杭州に帰還。	「ソ」軍の不法侵入に対し北支方面軍に協力を命ぜられ、中隊長の指揮する四機を以て急據西郊張家口に展開し、直ちに協力を開始し敵情を明らかならしむると共に攻撃。	作戦準備を完整しつつ訓練に邁進す	軍より配属せられ部隊の主力を之が中支移動の誘導に任じ七月上旬集中完了、	「と」号第四三八、第四三九、第四四〇各飛行隊(中練各一五機)を第二航空
							面決戦訓練に邁進	該派遣隊を以て隼黒櫻隊を編成
							大陸縦貫作戦の一転機に伴い主力を以て杭州一部を夫々嘉興、安慶に展開海正	

昭				
部隊長				
初代	二代	三代	四代	
大尉	中尉	大尉		
芝田	奔川	熊倉	岡本	
武治	偉	修	良夫	

昭	17	1717	至自	18	1817	至自	19	19	20	年
7	7	107	10	10	1010	10	11	11	2	月
29	30	2030	20	15			6	27	3	日
独立飛行才六六中隊 (靖才九一七一部隊)										
略 歴										
北支太原に在りて編成完結 満州移駐の為太原発、同日牡丹江省八面通着 八面通に在りて教育訓練に従事 八面通出發・同日海林着 海林に在りて教育訓練に従事 海林出發・同日海浪着 爾後至自一九八、一一〇海浪に在りて教育訓練に従事 昭一八、一二、二七軍令陸甲第一二〇号により一部の人員、資材を第五 六飛行場大隊より転入して編成改正 海浪発・同日大連着 大連出發・同日群山着 群山出發・海運台着										
軍令番号等不明										
摘 要										

	20	20	20
	9	8	8
	30	22	
	復員	小月着	爾後海運台に在りて終戦に至る 内地帰還の為海運台発
			内地帰還の為出 帆港、内地上陸 港等不明

1866